

第二回 地域交流セミナー

テーマ「記憶を旅する～能の旅人～」

【講演の要旨】

奈良は能の発祥の地である。それが室町時代に京都で花開き、江戸時代には基本的に武士のものとなった。いつ能が生まれたか、正確にはあきらかではないが、現在の200ほどある演目の多くは、650年前の十四世紀半ばにはすでにあっただと言われている。

能楽師には、シテ方とワキ方があり、私はワキ方に属していて、一生「ワキ」だけを演じる。脇役という言葉を連想するかもしれないが、ワキ方にその意味は元来なく、着物の前と後ろを分ける「ワキ」の部分の指している。ワキとは、着物の前・後ろの境のように「境界」を示す言葉だ。

能は大きく二種類に分けられ、現在能と夢幻能がある。

夢幻能の主人公である「シテ」は、多くは幽霊、神様、動植物の精霊であり、私たちの住む世界とは違う世界にいる異界のものたちだ。一方「ワキ」は、この世に住む人であり、ほとんどの場合、旅人である。「ワキ」はこの世の人がふだん会うことのない“あの世の人”と遭遇し、それを観客に示す。普段は見えない異界のものを観客に示すことができるのは、ワキが異界とこの世の「境界」にいる存在だからだ。

能には、笛、小鼓^{こつづみ}、大鼓^{おおづつみ}、太鼓^{はやし}の4種の楽器による囃子がある。能楽は昔から日中の野外で演じられていたが、現在でも明るい照明の下で行う。そこに異界の「シテ」が登場するわけだが、

その存在を感じさせるために、囃子が必要になる。囃子の音色は、あの世とこの世のあいだにある境目を破る役割をする。そうしてあの世の人物が引き出されて、その存在が動き、語るためのエネルギーが供給される。

日本には旅を題材にした歌がたくさんあり、『日本書紀』『古事記』『万葉集』でも歌われてきた。夢幻能の「高砂」もその代表と言ってよい。日本は時代の名称に地名を使うが、その場所はやがて特別な土地となる。奈良、鎌倉、江戸という地名と時代が結びつき、たとえば高砂という名を聞いたときも、その土地や、その土地の霊である神々の物語、そしてそこに住む人々の歴史が頭に浮かぶ。

こうして場所が歴史や神話を記憶としてもちはじめ、旅をすることによって、「ワキ」のように、場所の記憶を追体験していく。最終的にどこにたどり着くかが重要なのではない。色々な物語と出あうことが、日本人にとっての旅なのだ。